
地獄執事ハヤテ

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄執事ハヤテ

【Nコード】

N3365L

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

地獄の鬼妖怪、覇鬼を左手に封印した綾崎 ハヤテの退魔アクション。青鬼、絶鬼を手懐けているヒナギクも見所です。

1. 鬼の手（前書き）

ハヤテのごとく！で地獄先生ぬ〜べ〜をやってみようと思って執筆しました。

ぬ〜べ〜とは違う設定です。

ハヤテの左手…覇鬼

1. 鬼の手

練馬の一角に建つ古びた集合住宅、ムラサキノヤカタの一室に、水色短髪で童顔の綾崎^{あやさき} ハヤテは住んでいる。

ハヤテの左手には、黒い革の手袋がはめられていた。その理由^{わけ}は、半月前^{ひさかのば}に遡る……。

その日、ギリシャのミコノス島の一角に建てられた豪邸の一室で、ハヤテは一体の赤い鬼、覇鬼^{はき}と対峙していた。

覇鬼は三メートルほどの巨体で、地獄からやってきた最強の妖怪である。

この覇鬼、先ほどもで部屋の隅で横たわってる金髪縦ロールの少女^{てんのうす}、天王州 アテネに取り憑いて暴れていた。それをハヤテが白衣観音の力を借りて除霊したのである。

（くそ、こんなに凄い奴だったなんて……！）

「グワー！」

覇鬼がハヤテに攻撃を仕掛けた。

迫り来る大きな拳。ハヤテはバク転でかわした。

「うが！ があ！ うがあああ！」

苦しそうに悲鳴を上げる覇鬼。

（どうしたんだ？）

ハヤテがその行動を疑問に思った時、覇鬼が膝を着いて顔を両手で覆った。

「私を……私を封印してくれ。私がいっつを抑えてる内に！」

「え？」

覇鬼は顔から両手を退けた。その額には、おでこに十字傷のある男の顔が見えた。

「イクサ兄さん！？」

「ハヤテ、早く私もろともこの鬼を封印するんだ！」

「そんな！」

「何を躊躇ってる！？ 時間が無いんだ、早くしてくれ！」

「くっ……！」

ハヤテは意を決して駆け出しながら白衣観音経を唱える。

なむだいじだいひきゅうくきゅうなん
「南無大慈大悲救苦救難廣大靈感白衣観世音！」

そして覇鬼に飛びかかり、その体に手を失った左腕の先端をあてがう。

「白衣観音の力によりて我が左手に鬼を封印せよ！」

その瞬間、鬼は左腕に吸い込まれ、先端に手が現れた。それは人の物ではなく、明らかに鬼の手であった。

「はあ……はあ……はあ……」

ハヤテはアテネへと駆け寄る。

「アーたん、起きて！」

アテネの体を揺さぶる。

「う……うん？」

アテネは徐に目を開けた。

「ハヤテ？ 私は一体何を？」

「アーたんは鬼に乗っ取られてたんだよ」

「そう言われてみれば、鬼に憑かれたような……。で、その鬼はどうなりましたの？」

「封印したんだ。ここにね」

ハヤテは自身の左手を見せた。しかし、アテネの目に鬼の手は映らない。

「貴方、まさか鬼とやり合って手を！？」

「うん」

「これからどうするんですの！？ 手が無きゃ何も出来ないじゃない！？」

「ま、何とかなるでしょ」

——と言う様な事があり、左手に革の手袋がはまっているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3365/>

地獄執事ハヤテ

2010年10月28日08時32分発行